工藤　哲靖（くどう　てつやす）

編集委員報告

増える孤立死どう防ぐ

孤立死あるいは孤独死―。見守る人がいない、支援者もいない。マンションなどの一室で病気や自殺で亡くなる。死後、長い間発見されない。異臭が発生する。遺品が残される。その遺品から、亡くなった人の生き様が見えてくる。

核家族化、悪化する経済…

遺品整理業・吉田さん語る

キーパーズの社長　吉田太一さん

今年四月、米国のニュース雑誌「タイム」の電子版に、ある記事が掲載された。タイトルは「日本の『孤立死』ビジネスの好機」。

記事には、孤立死した人の遺品整理を専門にする業者の社長が登場する。高齢化や核家族化、経済状況の悪化などと、日本の孤立死の背景を指摘し、遺品整理のビジネスとしての可能性を示唆した。

札幌市で孤立死問題に取り組むNPO法人シーズネットの岩見太市代表は「核家族化が進み、単身世帯も多い北海道は孤立死が起こりやすく、真剣に取り組まなければならない問題だ」と話す。

道内でも起こりやすく

高齢者の社会的孤立を防ぐ活動に取り組んでいるお年寄りが、札幌に3千人はいるとみられている。その中には、頼った子どもと同居できず老朽化した賃貸マンションなどで独りで住んでいる人もいるという。

「タイム」に紹介されたのは、日本初という全国展開の遺品整理専門業者「キーパーズ」（愛知県）。北海道にも営業拠点がある。社長の吉田太一さん（46）に札幌で会い、孤立死について聞いた。差し出された名刺に「天国へのお引越しのお手伝い」と印刷されていた。

遺品整理は、残された荷物を単に片付けるだけでは済まない。

「わたしたちはごみやさんではない。本来遺族がすべきことを、遺族に代わってします。さまざまなケースがある。家を売る手伝い、車を廃車にする。遺体が腐り異臭が発生しハエがブンブン飛んでいるところでは掃除もする。ご近所との仲裁に入るとか、社会的なことも含めて死の背景にあるすべてのことに区切りを付けて、初めて遺族の方々はほっとできる」

遺品は、孤立死した人の生き様、性格などすべてを物語る。

「テレビは壊れて二つのチャンネルしか映らない、つぶれた冷蔵庫が置きっぱなし、割れた窓ガラスはガムテープで張ったまま、病院に行った形跡がない、借金の督促状が山ほどある…。精神的に、身体的に、社会的に、経済的に全部崩れているのが部屋を見ると分かるケースがある」

50代以降で、また高齢者に限らない男性の孤立死をよく扱う。

「退社に例えてみます。就職して20歳という『点』から歩き始めて、あとどう少しでゴールの60歳、そこで『ほい、高齢者』とシールを張られてゆったりできたのに、バブル崩壊や、リーマンショックやらで、思いっきり泳いで、つまり働いて、疲れ切ったところで大海にのまれてしまった。退職まで面倒見てくれると信用していた会社から放り出され、50歳過ぎて新しい出会いを求めろと言われても、なかなか難しい」

参会の中の無人島のように、誰ともコミュニケーションを取らず、ぽつんと暮らしている人が山ほどいる。

「今は一人で生きていけるんです。コンビニがあるからご飯をつくらなくてもいい。一人で遊べるものがたくさんできた。町内会など従来型のコミュニティーの再生なんて無理。コンピューター、ゲーム、マンガ、派遣労働…。一人でいたい人には、もってこいの状況がある。結婚しない、仕事しない、オタクで30代の人を見ていると、完全に孤立死の道を歩むだろうと思う」

ある一人のお年寄り、「孤次郎さん」の孤立死をめぐる、息子、ご近所、アパートの大家さんらの動きをアニメでまとめたDVDを作り、講演活動も精力的にこなす。孤立死について言いたいことも多い。

「孤立死しても構わないけれど、死んで何週間たっても見つからなかったときに、どんな影響を及ぼすか考えてほしい。天国から自分の腐った姿を見たくないでしょう。そうならないような生き方をしましょう。いろんな人と交流してもらうためには、ほかの人を観察しなくてはいけません。そんなことを念頭で終えているのです」

一人でも便利な現代／人との交流を

円山から見下ろす札幌市中心部。頂上に立った市民がつぶやいた。「マンションだらけになってしまったわね」（アニメはキーパーズ制作のDVDから）